

その名を：

淋しい家に住んでいる。今年も冬を迎えて、ますます厳しい淋しさと
なったこの家には、僕以外の誰も住んでは居ない。床がしんとしている。
窓から差し込む白い光がありがたい。陽だまりの中に入っていると、体か
ら少しだけ、空白感が抜けていく。温かみのせいだろうか。僕の中に何も
ないという、どうしようもなさだが、少しだけ脱するのだ。

柱の瘤を数えているような生活だ。普段の、仕事もなにもないときの僕
である。部屋の四隅に剥きだした、この部屋を支える柱には歪んだ年輪が
入っており、それが島のようになっていたり、ときどき節くれだったよう
に、瘤を持っていた。年輪を目で追う。視線でなぞる。瘤にぶつかるたび、
僕は「一つ、二つ、三つ」と口ずさむ。この手になにもないことが、それ
ほど怖かったのだ。

この手の、未来をときどき見透かすことがある。眠る前に、少し自慰をして心持ちが落ち着いて、全て洗って、そのままへたり込むように床に座ったとき、そして、両足をだらしなく伸ばしたとき、何気なく掌を見つめ、この掌がこれから追うであろう将来を予見する。一日後の掌には、なにも握られていない。十日後の掌には、なにも握られていない。百日後の掌には、なにも握られていない。千日後の掌には、なにも握られていない。万日後の掌には、なにも握られていない。億日後の掌は、もう掌自体がない。

期限としては短く、服役としては長すぎる。

陳腐な文句に、文句も言えず、ただ黙る。稚拙さには真実さえ宿らない。その悔しみを述べたところで、掌になにも握られていない未来は一つとして変わらない。現実には陳腐である。ありきたりだから、現実なのだろう。ただ、ありきたりと、頭から叩き割るには形は歪で、粗が目立つ。現実の

粗に期待する愚かさを許して欲しいと乞う。

恋を当分していない。そもそも、僕の人生を振り返って、あれが恋だと言える明確な体験が果たしてあったのかは分からない。空白の中に一つある。知らない名前を呼ぶ。誰でもいい。空白の名前を誰か。

あの名のとおりに演じてくれないか。

強い思いが駆け巡り、少し後で、なんて身勝手なことを思うのだろうと反省する。

その繰り返しの中で、淋しい家に住んでいる。

星の下

嚙下したシロップが、喉に引つかかって今もちよつと苦しい。一緒に空を飛んだはずの彼女は、抵抗ないように平然としていて、不公平を味わう。シロップは透明だったと彼女は言う。僕はそうは思わなかつたので、とりあえずブルーのようだったと答えた。限りなく——と言葉を続けそうになつた僕を、「ありきたりね」と一笑に付した。ありきたり、まあ、そうだね、うん、うん、まあ、まあ、こういうこと書いてるからありきたりになるんだな、と、まあ、なにも言えない。

また、シロップを飲む。

グラスビュー

見つめるのだ。そつと見つめ続けるのだ。そうして、グラスの向こうにある景色を、与えられるようにではない形で見出すのだ。例えば、色のついた硝子でもいい、真つ黒な烏でもいい、誰かのツマミの唐墨でもいい、色の澱みから上澄み取っただけののような発色をする殻でもいい、とにかく、見つめるのだ。誰かが言う。常に真実は、現実に映されてなどいない。それは生活の中にはなく、常に芸術の心にか宿らない。真実とは常に芸術家の魂の叫びの中に、幾分か含まれるものなのであると。

グラスを通してそれを見ることに、そういつた意義があるとか思つてんじゃねえよ馬鹿。

棺

死体が腐らなくて困っていたのだという。某国の話である。そこは基本的に死体は土葬であつた。手厚く、丁寧に葬ることが死者への手向けという、国だつた。だが、丁寧に葬っていたのがまずかつたらしい。無菌状態の棺では、死体が腐らず、次の死体が入れないのだという。そこで、妙案として、腐っていない死体を腐らせるため、墓に特製のストローを刺したという。そこから、気体の薬剤を入れ、ゆっくり死体を溶かして、スペースを空けるのだ。無事、どの死体も溶けてくれたという、腐ってくれたという。喜ぶ人たちを前に、なにか、強烈に根本から間違っている違和感を拭えないが、しかし、違和感がなんだ。世界には無駄しかない。黙って飲み込むのみである。

欠陥品

冷たい指を触れてみる。指紋の微妙な凹凸があり、その指紋は、私の指紋と時折噛み合うような、ズレるようなこそばゆさだった。私は肩を震わせた。手の甲に、ゆつくりと円を描く、真円ではない。幼児が描く撥条のような、曖昧な螺旋を書き付けた。反応はない。私がつめ息をついて、首の後ろに手を回す。小さい突起の感触があり、爪先で引っ掛けて、それを引っ張った。電源が入る。

「おはようございます」

「おはよう」

「はじめまして、お名前は？」

「全部やり直しなのね」

欠陥品はこれだから困る。

朝

朝起きたときにはもうとつくに飼ひ犬のボン・ボン・ボンくんが隣の雌犬と盛っていて犬さえ出来てるのになんで僕だけは未だにこうも童貞なんだと悲しみながら顔を洗ってみると鼻から血が出ていることに気が付いてティッシュで何度か拭っているうちに治まったのでそんなに僕は朝に興奮してたっけそんなにハッスルハッスルハッスルな年頃でもないんだけどと思つて横を見ると犬はハッスルしているので嫌な気分になつて朝飯の邪魔だと思ひながら食べないわけにはいかないのでトーストを焼いてマーガリンを溶かしてカリカリ食べているとそういうえばトランス脂肪酸がどうのつてネットで言つてたけどなんで僕普通にマーガリン食つてるんだろうなんて疑問が湧いてきたのでついだと思つてトランス脂肪酸についてネットで検索をかけてみると書いてあることが難しすぎてよく分からなかつたのでやっぱりどうでもいいやつと思つて会社に行くための準備をしていると行為を終えた犬が好意なんてないやつてばかりに雌犬に冷たいのでそれはな

いだろって我がバカ犬を叱っているとピンポン鳴ってハイハイって犬を抱えながら出ていくとお隣のオバサンであちゃーと思っっている。我が家にいる隣の犬がへらへらと出てきてあらあらモモちゃんたらまた安木さんちのボンくんのとこにいたのねもうラブラブねお邪魔してすみませんねって僕に笑いかけてきて犬がこんなに仲いいなんて不思議な縁を感じますねなんていうものだからえーオバサンとの縁なんて欲しくないよこれが女子大生なら人間同士も交尾って話になるのになって思っっていることは一切見せないままいやいやモモちゃんかわいいワンちゃんですからねって答えるとオバサン嬉しそうに出て行つたのでボンを家に置いてじゃあそろそろ会社に行くからなって言い聞かせているうちに隕石が降って世界が滅亡したんです。

トンネルの中は真っ黒

トンネルを抜けると、抜ける前に私はとつくに死んでいた。なぜだろうか。

そうだ。

なぜかと言えば、殺されていたからだ。

殺された理由は、簡単で私が彼の財産を奪ったからである。

いくらほど奪ったかというと十億だ。これほどの大きい金額ならば納得
だろう。

誰に殺されたかというと、客として紛れていた健吉である。

健吉は誰かというと、敵である。

互いに職を失ったときに、手元に残っていた莫大な財産を奪い合い、最終的に私が十億円奪ったのである。

互いに企業したときには彼の会社を真つ先に潰した。

彼とは、一人の声を取り合ったこともあつたと思う。

そういう敵であつた。生涯の敵であつた。

いつから出会ったかと聞かれれば、中学生の頃である。

その前は彼とは知り合わなかつた。

ともかくとして、私は死んだ。彼に殺されたのだ。

さらばだ。

抜けることのできなかつたトンネルの中、ここは真つ黒である。

崇めよ、崇めよ

とにかく、仰ぎ見ろと人は言う。なぜ、仰ぎ見るか（———のような信じるようなものをするか）、そこは重要ではない。仰ぎ見ることで救いがあると思ふことができるが、なによりも重要で、救われると思ふことが核心で、自分を救ってくれる、そんな都合のいいもの（———が、存在してくれるの）だと信じていることが、仰ぎ見るその人にとっての、大事なことだった。干してある白い布が、よく風に靡いている。あれさえ、人に言わせれば、対象とすることが出来る。ある特定の人種はそういうだろう。芯（———無形的な一つの超越）になにかあるかなど、誰も気にしていない。気にすると、それは変わったで、まず社会では見かけないので、居ないのも同然だと見做して、無視（———だいたい）の共同体においては、事実的な抹殺に等しい現象）をすればいい。透明ということ、納得すればいい。ともかくとして、人々は芯など気にしていない。気にしているのは、芯ではなく、芯が齎す、ごりやく（———利益）得こそが彼らの行動の源泉である。然し、彼

らは同時に、得を己だけが受ける事は、己への恨みを買うことを知っている。ゆえに、上面は得を避けようとする。得を避ける、が得は取りたい。そのジレンマが齎した結果こそが、仰ぎ見よということだ。仰ぎ見る者の一部はこの事実に気づき、ゆえにそれを隠蔽するために、敬虔であろうと様々な考えや論理を積み上げた。しかし、ならば、元々無いほうがよっぽどマシだ。だが、出来てしまった限りは仕方ない。郷（――業）に入つては郷（――業）に従え。

崇めよ、崇めよ（――くそくらえ、くそくらえ）。

名言

これはよく出来ている（――出来てはいない）と画廊（――ここは暗喩である）の絵（――同左）を見て呟く彼（――存在していない、大勢の一人を指した三人称）は、大げさに絵を褒め称える。素晴らしき名言が、飛び交う。大河を渡るような心地を持っている、一つのあるシーンを描いている、饒舌な彼は比喩が上手いのだ（――という、比喩。実際の彼は「とても良いと思いましたが」としか言えない人形で、そもそも文章など読んでいない）。

嘘つきは泥棒の始まり

自分を理解してくれる人がきつと世界のどこかにはいて、だからこそ、ニツチな方法論で、これからの世界は自分の収入を得ることが出来る（――嘘つきは泥棒の始まり）のです。

当然ながら、僕はそんなもの信じているはずがない（――嘘つきは泥棒の始まり）のだけど。

それでも、僕がつらつらと小さい文章を綴るのは、醜い自己承認要求がさせている、極めて知性に欠けた行いである。

同時に、こうやって自己を過度に貶すのは、防衛本能の働きであり、これによつて、人からの批判を避けているのだ。

では、避けないようにしよう。さあ、みんな、僕を叩いてくれ。

僕だって心の片隅に、それくらいの覚悟ならば残っている（――嘘つきは泥棒の始まり）と信じている（――嘘つきは泥棒の始まり）のだ。

だから、さあ。お願いだ。批判をしてくれないか。正直に言えば、批判

されれば傷つくのは当然のことだ。

しかし、僕は甘んじて受け入れたい（――嘘つきは泥棒の始まり）と思っている（――嘘つきは泥棒の始まり）。

僕は両手を広げて（――嘘つきは泥棒の始まり）、みんなの前に（――嘘つきは泥棒の始まり）立とう（――嘘つきは泥棒の始まり）。

殆どの人が、僕になど注目していないかもしれない。事実、あまり、人目に晒されていないようだ。

なんて悲劇（――嘘つきは泥棒の始まり）なんだろう（――嘘つきは泥棒の始まり）。喜劇（――嘘つきは泥棒の始まり）とも言えるかもしれない（――嘘つきは泥棒の始まり）。

注目してもらえたら、喜ばしいことに（――嘘つきは泥棒の始まり）批判だつて貰える。

僕にはそれすらない。

だからこそ、（――嘘つきは泥棒の始まり）注目が欲しい（――嘘つきは泥棒の始まり）と願っている（――嘘つきは泥棒の始まり）。だが、同

時に注目されるのは（――嘘つきは泥棒の始まり）どこか怖い（――嘘つきは泥棒の始まり）。ジレンマに悩んでいる（――嘘つきは泥棒の始まり）。

そうだ。

盗みを働こう！（――嘘つきは泥棒の始まり）

月下

血を吸われていることに気が付いて、僕は目を開ける。彼女がいた。またかど溜息を付く。これで何度目になる。よく覚えていない。ともかくとして、月下、彼女は僕の首筋を噛んでいた。やがて、血を吸っていた彼女は、吸い込まれるように僕の血管の中へと、しゆるしゆると入っていく。不気味だった。しかし、いつものことだった。意識を失う。

「あんまり、はしやいで走り回るのはやめなさい。みつともないわ。ほら、あなた、あんまり走り回るものだから、音程が変わってるじゃないの。あなた、キヤーツでしょ。キヤーツの黄色い悲鳴なのに、ちよつと音程が上がって、それじゃどちらかというと、キイーツよ。あなた、キイーツさんになってるわよ」

「はあ？ キイーツとか、マジ、ウケるし。言ってることイミフじゃん。私、キヤーツだし。キイーツじゃないし。知らねーっつーの」

「本当になってるのよ。いいから、ちゃんと人の話は聞きなさい。キイーツって聞こえてるわよ今のあなた」

「うぜー。バカじゃないの。ババアの方こそ、喋りすぎて、クスクスじゃなくて、ゲスゲスって感じだけだ」

「まあ、ゲスゲスとはなに？　それが親に向かって言う言葉なの？」

「言葉あ？　はあ？　マジウケるし。言葉とか。ウケるわ」

「ちよつと、ちよつと、話はちゃんと聞きなさい」

「話はあ、ちゃんとお、聞きいなさいとか、ぷっ。ぷっ」

「いい。そんなんじゃない、外に出たときキヤーツだつて思われないわよ。本当にキーツと思われちゃうのよ。それいいわけないでしょ」

「別にいい。私、友達の間でちゃんとキヤーツだつて解つてるし、別にそれで問題無いじゃん。うっぜーな。きめーんだよ。あー、きめえ。うぜー。ははっ、ババアのゲスゲス、クソウケる」

「もういいかげんにしなさい。なんて子なの」

「うるせーな。騒音のくせに、マジウケるし」

「あ……」

「あ……」

二人とも、ボエーツつてなつて、出て行つた。

松阪牛背中男

薄暗闇から男がぬうつと現れた。出で立ちを言えば、中折れ帽にコート、常に濁った瞳で鋭くあたりを見回し、皮肉の上手そうな口が、得意気に折れ曲がっている。葉巻を啜えて、吸う。香りを噛んで、ゆつくりと舌を回す。口から零れた、白い煙は亡霊のように空気へと消えていく。

ところ変わって、薄汚いヤクザの事務所。

焦りを見せているのは、宝石のあしらわれた指を、せわしなく蠢かせている、巨漢だ。

ダブルのスーツ。釦は今にも銃弾のように跳ね跳んでしまいそうだ。

「お前、何をしてくれたんだ」

机を靴でドンと叩き割って、巨漢は床に土下座する三下を、驚かせた。「ひいつゝすんません。すんません。そんなつもりじゃなかつたんです。ちよつと、弱そうな老人を脅すつもりで。なんの変哲もない爺さんだと

思ったもんでして」

「言い訳はいい。ともかくとして、お前が奪った爺さんは、ただの爺さんじゃないんだ。不味いぞ。これはあいつらに、ウチを荒らす口実与えたよ。うなもんなんだ。お前、それ分かっていつてるのか」

「分かってます。分かってます」

「分かってるなら、責任取れ。こんな事態にした責任を取って……」

ガツガツと、激しい音で靴を鳴らす。喋っている途中だったが、突然思い立ったように、巨漢は三下を蹴り飛ばす。顎から蹴り飛ばされた彼は、その、くるとアーチを描いて、回転し、元の土下座した姿に戻った。

もう一度、ぺこぺこ頭を下げる。

「分かってます。分かってます。本当に。本当に。本当にすみませんでした」

「すまないなら、責任を取れって言って……」

また、途中で言葉を切って、叩き割れた机をもう一度叩き割った。これで四分に割れた。

「責任責任責任責任月火水木金土責任」

巨漢が言う。

「肉饅くん。こういう場合、組織の親球というのは、責任の所在よりも、先に問題の解決を先に済ませるものだよ。親玉ならね」

事務所に響く声に巨漢、肉饅は驚く。

「その声は」

「最も、その程度の器の親玉だからこそ、その程度のチンピラを雇ったとも言える。似たもの同士というやつだね。ま、結論から言えば、自業自得だよ。責任を問うならば、お門違いというやつだ」

「貴様あ」

肉饅は苦々しく、その名を呟いた。

「松阪牛背中男」

「いかにも、松阪牛背中男——もとい、焼き飯蓮華刑事だ。さあ、組長・肉饅及び、つみれ汁組の組員たち。皆、おとなしく、手首にワツパを通してもらおうか」

松阪牛背中男——もとい、焼き飯蓮華刑事の活躍はいかに。

とりあえず、僕は鍋が食いたい。

誰も背中なんて持っていない。その中で、背中と背骨を持つことは、とても恐ろしい。

例えば、背中に石をぶつけられたとしよう。

石をぶつけたやつは逮捕されて、投獄されるだろう。

しかし、背中に石をぶつけられたただけだが、言うのだ。

背中を持っている方も悪い。

その論理は、皆、背中を持っていないために通用する。

背中を取り除かなければ。

焦った君は、眼孔に指を入れた。人差し指の第二関節までが、孔の中へと、沈んでいく。探る。指を曲げ、伸ばし、孔の中にあちこちに、指を伸ばした。指先が背骨にあたった。感触の気持ち悪さに指を離す。

眼の調子がおかしくなっていた。

眼孔に指なんか入れるからだ。

それと、背中が入っているせいだろう。

君は、眼をナイフで割ろうとした。うんざりしたせいだった。

ナイフで割った君を見て「バカだな」と人々が嘲笑する姿が浮かんだ。割る必要なんて無いのに、わざわざ割るなんて、頭がどうかしているな。

あいつは、そういうやつなんだ。

割れない。

落ち込んだ気分で、君は、眠る。

もう考えるのはやめた。

空

空を掘って、抜け出すことを考えたのはいつのことかよく覚えていない。ともかくとして、その日、僕は空が土塊のように、ベタツとした質感のなにかであることに気づき、そして、長いスコップでコツンと先を啄いてみたりしたのだ。

ボロボロと取れていく空。僕の顔に、青いそれがいくつも落ちてきて、ずっと冷える。あまりにも体が冷えてしまうので、これは風邪を引いてしまっただけだった。実際、数時間後には、用もないのに体が震えてきて、芯から妙な熱が込み上げてくるのが分かった。風邪を引いたのだ。

三日後には、ベッドの上で寝ていることになった。白いシートの下、僕は鼻水を垂らして沈黙する。時折、啜る。基本的には、マスクを付け、頭には冷たいアイスシート、体温は上がり続け、夢うつつの中、朧気な視界、

だんだんと緑色に染まっていく、自分の認識を覚えながら、夕靄色の窓から空の光景を見る。陽が沈もうとしているのだ。

それは困ると思いつながら、布団の中に入る。

眠い。

困るが眠い。

やがて、睡眠に入り、僕は目が覚めた。

そうだ。やろう。

残念

犬が駆け寄ってくる。彼に触ろうとした途端、後ろから、祈祷師が呪文を唱えてしまった。残念。犬はゾンビになった。猫を見かけたので、触つてみようかな。彼女に触ろうとすると、背後から、呪術師がおまじないを掛けてしまった。残念。猫はゾンビになった。女性が駆け寄ってくる。残念。ゾンビになった。金髪の髪だけが、やってきているじゃないか。残念。それもゾンビになった。家電が、空から降ってきた。残念。ゾンビ。檻の鍵はいつ手に入るの。残念。ゾンビ。

感触

色彩を帯びた音たちに囲まれて、温かい気持ちで眠れ。ときに明るくも暗くも冷たくも熱くも全てを帯びるが、色彩の全てを感じて、明日への夢を見る。言語の混じった色を見るべきだ。温度の混じった音を触ってみるべきだ。

例えば、クリノリンだけを付けた少女の、クリノリンの先には操り人形が付いている。その人形一つ一つが絶えず、細々と動きまわり、見ている人たちを惹きつける。パンピキンの不気味な顔に照らされながら、夜の薄暗さでそれを見つめる、住人たちは全て、黄色い目で現実を呼び寄せたがっている。

感じるとはかくあることだ。であるべきだ。

虹を食べる

虹を食べる。病みつきにさせる泥のマスクを被って舞踏会の壁に、足を付けてみる快感に等しい行為によつて、（――舞踏会の壁は嘘だ。本当は鉄骨の芯に含まれる鉄の、吸い付きやすそうな心の中に、それは存在すると考えられている。存在するというのは、つまり、カモメの飛び立つ瞬間を捉えた雫のことで、東京の上空に伸びやかなアーチを描いて、ファツツ・ドミノのピアノ高らかに線を切つて、指を弾こう。鐘が告げるのは、先人たちの教えと超えたバラードの名演がなせる、罪のオトシゴを負つた、あのナツクスとの衝撃なのだ。先生！ バナナを忘れました。それではバナナを入れよう。鐘が告げるは、ばーなーな。あつちを向くとトマトが見える。しかし、カボチャの種はいつも取りづらい、そもそも、包丁で斬るところにいかに向いていない植物かという疑問は絶えることがなく、パスタの麺と絡む、絡むついでに思い出したが、女優のカラミはまだか。あれは楽屋で、ハードディスクに、己を刻む作業の真つ最中。ところで、今は何時

だっけ。汝は、山田。山田太郎。いいから、早くボール拾えよ。なんだ、このふざけたカツ麺。いい加減に注ぎ線はないのか。底が抜けてて、底抜けに明るいつてオチはどうだ、すごいだろう、何もかかってないんだぞ。掛かってない、素のうどんが一番上手いんだよ。でも、まずいな。アルエツト、セニヨリータ、早く、下着を着ておくれ。クローゼットの中に隠れる前に、防虫剤を抜いた方がいい。あーこれは、）死んだほうがいい。

そうかな。

離れている

私の手は、現在、雲の上にある。対して、私の足は椅子の下にある。心は遠い海の向こうにある。頭脳は地中深くに眠っている。耳はビルの屋上にある。目は全てを見渡している。

手はやがて落ちて、誰かの頭を撫でていた。気味悪がられて、乱雑に道路へと投げ捨てられ、トラックのタイヤに危うく轢かれそうになった。親指とその他四本の指でぺたぺたと、道路の上を逃げていく。ふと、誰かのお尻を触ったらしく、地中深くにある頭脳が目覚めた。椅子の下にある足の裏が、つーつと真つ直ぐに立った。遠い海の向こうから、鼓動がずんと伝わった。女性が大口を開ける。叫んでいるようだが、耳は、ビルの屋上、ビル風の強いびようびようという音しか聞こえない。手に痛みが走る。なにかが突き刺さったようだ。椅子の下の足が、どんと跳ねる。心が申し訳無さを思うが、遠すぎてこちらに伝わらない。頭脳が口はどこかと探し始める。いやいや、そもそも体はどこなのだ。

体、つまり、腕や、腹や、臓腑や、とにかく、体だ。

腕は……ああ、なんだ、頭脳と同じ地中にある。腹は海中で沈んでいるように、魚に食べられそうなのを、必死で、ふともみが防いでいる。腹筋を使って、ウヨウヨと逃げまわる。口は……なんと、まだ空中に浮いていないか。そうか。

ところで、体はどこだ。ないな。

彼女と僕の終着

六十九階でも構わない。僕らの先は、既にそこに決まっているなら、もう進むしかないだろう、と、彼女は冷淡に言った。「痒いのだ」という、羨ましくも、妬ましくも、うつとおしくもあつてだから痒いと、よく爪を立てて、肌を撫でていた。慰め合いも、励まし合いも、傷の舐め合いも、全てが痒くて仕方なかった、と彼女は吐露したことがあつた。

憎んでいるわけではない。ただ、痒くて痒くて、そこには居られないのだ。勝手に生きるならば生きてくれればいい、と、ボヤクこともあつた。それは彼女の本音なんだろうと僕は思う。

今日はちよつと動きすぎたな、と僕は呟いた。あんまり、普段動いてないもんだから、急にこんな風に動きまわると体のあちこちが言うこと効かなくなるや。僕は、ダメだなあ。もうちよつと、もつと、頑張っておけばよかつたよ。先に。

彼女が目深に被っている帽子を持ち上げて、僕を見た。いつもどおりの

鋭い瞳だった。十分じゃないの、別に。これくらい動ければ、と彼女は言う。僕を励ますつもりなんだろうか。あれ、僕を励ましてくれるの、と訊くと、バカじゃないのと返ってきたので安心した。いつもどおりだ。これなら、六十九階でも構わないな。いつもどおりじゃないと、少し不安だった。

彼女がうづくまる僕の背中に、自分の背中をくつつける。

温かいなあと感じた。

口から赤を吐く。彼女が僕の異変に気づいて、肩を押さえる。僕を揺らす。もうすぐ、六十九階、地下六十九階だ。だんだんと近づいていく。だんだんと遠ざかっていく。どこから？ ああ、知ってる。あそこだ。目的地が見える。いや、見えなくなっている。目が見えない。音しか聞こえない。六十九階、六十九階がもうすぐ。

彼女がエレベーターの中で、耐え切れないように息を漏らした。僕は嬉しいなど思った。

アトランテイツク・マム

名 称 アトランテイツク・マム

原材料名 鶏肉、蟹、夢見灰色のなに

かに相当するもの、水あめ、

アトランテイズム、水酸糖れ

ん乳、食用マヒマヒ、香料、

カラメル色素、乳化剤

内 容 量 50g (個別紙込み)

賞味期限 欄外三親等先に記入

保存方法 染毛態外気の付着はおさけく

ださい。

製造者

プラゴ・ミズレーバ・ブルー製造株式会社

——アトランティック・マムの味は深い。表象をコマ一つ一つに焼き付けた映画のごとく、ある種の社会性とある種の個人性、ある種の宗教性、

ある種のサナトリティックな、かつ、二つに割れた——いや、三つかもしれず、四つかもしれず、それは個々の感性次第であるところだが——足で手を捌いたような快感を備えて、一種の「ココにある」という瞬間を呼びさます装置として機能している。

——ウヨヒ・ヒメダチ・ガリア

いんこは鳴かない

捉えられない街の中を歩いていた。この文章はそこで記されていたものを、私がそつとメモをし、それから、しばらくして、外にだすべきか否かを迷い続け、そうして、今ココに記すことにした文章である。この文章は街の空に、貼り付いていた。そして、夢を見るように、ふわりとした気持ちで腕が伸びて、私は回収できたのだ。

いんこは鳴かない。

同じ場所へ

抱きすくめられて、声を上げた赤ん坊は、やがて夕日の背中に乗って立っていった／きつと、明日の午後には雨降りの中で、サーカスの傘を差した無邪気さに支えられて、一人で無事に目を閉じるだろう／浅い眠りの中で、曇天を見上げて、忘れてしまったはずの遠い人形を、掌に握りしめる／いや、この掌は赤ん坊の、ではなく、僕の、を指しているのだが／そして、取り戻すように、僕もまた眠りにつくのだ／浅い静寂、虹が足元に見えるような光景を抱いて、同じ場所へ回収される／

きつと

「僕はまたきつと、周りの目を気にしながら『自分の意志でやりました』と、そう言い放って、周りを喜ばせるのさ。くだらない」

「実際は周りが怖いだけなのに」

サーカス

今年のサーカスの一団は奇妙だ。ピエロがまずいないのだから、そして、ライオンがいないのだ。次にバレリーナもない。体操選手、いるわけもない。団長がそもそももない。酔を好んで飲んでもいない。空中ブランコの曲芸師たちも、見当たらない。そして、なにを思ったか、ただ、普通の人だけがいて、ボールの上に乗ってわざと転んでみたりしてピエロのフリをしたり、爪をむき出して柱を引つ掻いたりしてライオンのフリをしたり、足を真横に広げたままると回ってバレリーナのフリをしているのだ。曲芸師のフリをして、高さニメートルのブランコに足を下げる者もいる。そして、統率を取るかのようなフリをして、腕組みし、見守る団長が居る。

しかし、悪いが、私が見てきた限り、ピエロもライオンもバレリーナも曲芸師も、そして団長も、去年のサーカスではそんなことなどしていなかった。

気球

烈火を乗せた気球が飛んでいる。撃ち落としたりたくて、仕方ない鳥たちは、必死に啄いて気球の膨らみを割ろうとするが、しかし気球の皮は思ったよりも厚く、まず破れない。パチンコを飛ばす子ども、戦闘機の機銃、対戦車ライフル、雷、様々を持って気球を撃つが、しかし割れずに飛んで行く。そのうち、誰も興味を失なつたころに、ふと割れた。

フアーベラルティン

人はみな、フアーベラルティンのせいだという。フアーベラルティンとは、誰かが事故で生成した、概念であり、それは絶え間なく、陽青色をしながらも、時折には黒天色と化していると言われる。概念的かつ、物質的で科学者の興味も突きず、哲学者の心も満たし、社会学者はひっきりなしに引用をしている。このため、フアーベラルティンは、様々な場所で用いられている。例えば、吸い込む空気の中、水中、歓びの迸り、隔たり、文字の中、あの丘の向こう、天の采配、地の湿り、虎の子走り、蝶の舞い、明日への祝い挙げればキリがない。悪事の中にも、フアーベラルティンがあり、しばしばフアーベラルティンの危険性は説かれる。だが、危険性の中にフアーベラルティンがあつても、フアーベラルティンの中に危険性はない。フアーベラルティンは概念としてフアーベラルティンであるゆえだ。

だが、危険性があると言いたいのだ。